

## 日本社会学の国際化の理念・方法・課題 - 日本社会学会の国際化活動 -

矢澤修次郎

日本社会学会会長・成城大学教授

### 1. 日本社会学会の国際化活動 渉外から国際交流へ

戦後ユネスコの音頭の下に国際社会学会が結成され、日本はその創立メンバーになった。しかし学会の大勢は、極めて内向きの姿勢に終始した。〈一部の cosmopolitan, 多くの nationalist〉といったところだったろうか。国際的活動、対外的活動は、渉外委員会の仕事としてあった。問題は絶えず外からやってきた。国際社会学会からの世界社会学会議開催要請、ソビエト社会学からの交流要請、韓国社会学会の共同研究の呼びかけなどが記憶に新しい。80年代になったようやく、国際交流を担う委員会の名称は、渉外委員会から国際交流委員会へと変化した。

### 2. 日本社会学会の指導層の国際化に対する賢明なリーダーシップ

そのような状況の中で、社会学会の指導層は、国際化に対して極めて賢明なリーダーシップを発揮した。尾高邦雄、福武直、古屋野正伍、綿貫譲治、森岡清美などはその代表者である。とりわけ福武直は、世界社会学会議の開催は時期尚早と判断しながらも、その開催を将来の目標とすると同時に、アジア地域の社会学の連携を目指すアジア社会学会議を創設した。福武によって提示された基本的方向性は、その後の社会学の国際化の方向性を規定することになった。以上のような指導層のリーダーシップから判断すれば、日本の社会学は、その発展のためには社会学の国際化が必要不可欠であることが分かっていた、とすることができるだろう。

3. 1990年代以降、社会学の国際化は一段と進展し、近年においてはグローバル社会学の構築の重要性も視野に入るようになってきた。日本社会学会は、人文社会科学の分野において先進的に英文ジャーナル (International Journal of Japanese Sociology) を発行するようになり、韓国社会学会との交流プログラム (ジョイントセッション) を持ち、学会大会に外国からの招待講演者を迎え、これまで国際化のネックになっていた言語の問題を克服すべく、国際会議でのプレゼンテーションのためのワークショップや英語セッションを組織するまでになっている。そして今まさに現在、2014年に国際社会学会の世界社会学会議を組織しつつある。

4. 以上のような日本社会学会の国際化活動の歴史は、何を意味しているのだろうか。そ

それは第一に、健全な国民社会学を作り発展させるためには、社会学の国際化は必要不可欠であるということである。それは第二に、国民社会学の形成・発展、社会学の国際化のために重要なことは、社会学を当該国民社会の市民の生活の一部にしてゆくことであるということである。そして第三にそれは、ローカル、ナショナル、リージョナルなレベルから、いわば下から、言葉の正しい意味でのグローバルな社会学を徐々に作り上げて行くことが重要であるということである。

5. 報告者は、このことを国際社会学会の歴史、ならびに近年における Michael Burawoy の National Association Committee の運営、さらには日本社会学会の招致委員会が行った世界社会学会の横浜への誘致活動から学んだ。国際社会学会は、長年、リサーチ・委員会を中心に発展してきたが、いわゆる「ヨーロッパ・クラブ」の性格を脱することが出来なかった。今でも出来ないでいるが、ここに来てナショナル・アソシエーション委員会に結集する各国のナショナル・アソシエーションの主張の重みが増してきている。その委員会の指揮を取る Michael Burawoy は、徹底的にローカル、ナショナル、リージョナルなレベルにおける社会学の建設を重視しつつ、下からの積み上げによるグローバルな社会学の形成を重視している。この立場は、欧米の社会学から多くを学びながらも、それらを普遍的な社会学とする前提を置かず、当該単位の社会の社会的考察、社会的分析を自律的に行い、それらの成果を一つ一つ積み上げて、グローバルな社会学を作り上げて行こうとしている。グローバル社会学の現状は、indigenous sociology を確立しようとするもの、普遍的、支配的な北の理論に対して南や東の理論を対置し、後者の優位性を確立しようとするもの、普遍的な理論に対するオルタナティブな理論を作ろうとして結果として両者にそれほど大きなギャップがないことを発見しているもの、従来の普遍的な理論と考えられていたものを普遍的なものとして提示しているものなど、多様性に富んでいる。そしてグローバル社会学の確立という目標は、遥かかなたにある。

しかしこの立場が重要なのは、その遥かな目標を見据え、それに比して現状は多様性に富んでいることを認識しつつ、その目標を達成するために、概念、理論をも含めてローカル、ナショナルであることに戻り、そこから再びコスモポリタン、ユニバーサル、グローバルへと突き抜けて行こうとすることである。社会科学の国際会議を重ねれば重ねるほど、誰でもが切実に思うことは、ローカルに帰らなければならないということではないだろうか。

6. 2014 年の国際社会学会の世界社会学会議横浜大会を控え、またその先そう遠くない日本社会学 100 年を迎えるにあたって、今こそ、もう一度、良き国民社会学の発展のためには、正確な世界の社会学像を確立することが必要不可欠であること、したがって多くの多くの社会学者は、自らの社会学の国際化を行う役割を担い事の重要性を、再確認する必要がある。日本社会学会は、先人の残してくれた遺産の上に、この課題を果たすべく努力を

重ねてゆく。